

フェスの転換中。それは客にとって最も退屈な時間だ。もう音は出てるのに何をそんな嚴重にチェックしているのかと、苛立ちながら数十分待たされる。早く始めてくれよ、と立ちっぱなしのまま念じるのが常だ。

実際、僕も退屈だな、と思いつながら、ギタリストがいくつものエフェクターを切り替えては音出しをするのを眺めていた。手持ち無沙汰だと、自然と思考が泳いでいく時間になる。僕は前の出番のバンドのボーカルが、「声出せ！」と客を煽っていたのを思い出していた。演奏終了後に、友人と交わしたやりとりも。

「声出せ」って煽り、嫌いちゃんね」「え、何で？ 定番やろ」「声出せ」って、部活じゃないんやから。だいたい、スネアと合わせて「オイ」と「アイ」の間くらいの声

出して、グーにした手を突き上げる動きとセットやろ。あれ、正直なかなか乗り切れん」

それは、前から思っていたことだった。あとは、「後ろの方、サボってるのバレてるよ」みたいなのも苦手だ。だって、たとえば腕を組んで目を閉じながら聞いていたとしても、そいつの心が動いていないとは限らないじゃないか。

あの日の、僕のように。

自然と、僕は初めてライブハウスに行った日のことを思い出していた。

あの日の僕は、客席で腕を組んで、目を瞑っていた。そうしないと、自分の中の衝動がかき消えてしまふんじゃないかと思つたから。

もちろん、音に合わせて声を出したり腕を振ったりするのが気持ちいいし楽しいことは知っている。ただ、心臓を掴まれたときのリアクションは、それだけじゃないのだ。

ツェー、ツェー、ハー、ハー。ボーカルのマイクチェックは毎回、日常生活では出さない声を出している。

サウンドチェックに適した発声。

転換の作業が終わり、ステージからメンバーがはける。ひと呼吸おいて流れ出したSEとともに、勢いよくメンバー全員がステージに飛び出す。歓声があつと沸き起る。

すぐにドラムが一曲目のイントロのフレーズを叩き出し、そわそわしていた観客たちが思い思いに身体を動かし始める。

フレーズの間隙に放り込むように、僕はマイクを手にとって客席へと言葉を投げた。

「好きに楽しんでくれ」

あの日の僕にも届くように。

「こっちに来たいなら、いつだって来ればいい」

今日この中の誰か一人でも、人生を変える衝動を得られるように、歌う。

#### 【コメント】

ミュージックシティ天神に、まさか観客ではなく小説家として参加させていただけるとは...!! 短い小説ですが、楽しんでいただけたら嬉しいです。



## 森バジル

福岡在住の兼業作家。

2023年『ノウイトオール』で

第30回松本清張賞を受賞し、単行本デビュー。

最新作『探偵小石は恋しない』が小学館より9月18日発売。